

<書評>

津田英二著

『生涯学習のインクルージョン 知的障害者がもたらす豊かな学び』

明石書店 2023年4月

高倉誠一（明治学院大学社会学部社会福祉学科）

本書は、生涯教育のありようをめぐり、とりわけ排除されやすい知的障害のある人に着目することによって、生涯教育をより確かに、どの人にも通じる豊かな営みにするために議論を展開するものである。

本書では、国内外で障害者の生涯学習を推進する流れを背景として、知的障害者の学びに焦点を当て、インクルーシブな生涯学習の原理・制度・実践についての知見を積み上げることがめざされている。

第一部では、障害者の生涯学習推進政策の背景について実践的・理論的に捉えるとともに、社会教育行政や社会教育施設の課題が取り上げられる。日本では、障害のある人の生涯教育に関心が向けられてこなかったが、2014年に批准した「障害者の権利に関する条約」において生涯学習の確保が求められていることを契機として、文科省は2017年に「障害者学習支援推進室」を設置、以降、障害者の生涯学習推進政策の具体化が始まった。

障害者の生涯学習推進施策は、教育実践を創出しようとする教育運動の側面をもつゆえに、国家のロジックと衝突することもある。国家は、国民から得られた正統性よりも、国際的な合意、経済的合理性、法的正義に基づいて政策を進めようとするからである。「子ども食堂」をはじめとする「子どもの居場所づくり」の運動が、共生社会を生み出していく自律的な「下からの教育運動」であるとすれば、「下からの運動」と「上からの運動」がよい循環を見せており、参考にすべきである。障害者の権利条約の批准以降、障害のある人の生涯教育は国がリードしている形をとっているが、あくまで障害のある人が主体であるべきと警鐘を鳴らす。

第二部では、知的障害者の学びの現場をノンフォーマル—インフォーマル教育の観点から分類して捉え、それぞれ実践論の視点から、インクルーシブな学びの理論構築をめざす。今日、学校教育システムは、高度に組織化・制度化がなされているが、イヴァン・イリイチは、過剰な制度が人間の力を奪うとし、本来は人間に力を与える制度であるはずの学校が、逆に人間の力を奪っているとする。フォーマルでない別の教育のあり方を模索する中で、インフォーマル教育、ノンフォーマル教育という教育のかたちが注目されるようになってきた。

知的障害者が参加する学びの場づくりの実践として、著者が所属する神戸大学が開設したインフォーマル教育実践としての「のびやかスペースあーち」（6・7章）と、ノンフォ

フォーマル教育実践としての「学ぶ楽しみプログラム」(8・9章)が取り上げられる。インフォーマル教育実践を丁寧に分析しようとするれば、個人や関係の変容を把握することになるが、その枠組みとして著者は「場のちから」に着目する。「場のちから」を「教育の価値を実現する人や場の関係をもたらし、実践現場に内属する多様な構成要素をもつ力」と定義し、「あーち」に集まる人たちから得られたデータの分析を積み重ねてきた。運営側の意図性が、「あーち」での活動と場を共有する人たちの認識や行動に変化をもたらしていることが確認できる。

「学ぶ楽しみ発見プログラム」(愛称「KUPI」以下、同じ)は、知的障害のある青年が、週3日大学の授業を受けるものである。国内ではパイロット的な取り組みだが、国際的には決して珍しいことでなく、韓国ナザレ大学のほか、アメリカにも知的障害学生に対する教育プログラムを提供した大学に補助金を出す制度がある。

「KUPI」の取り組みでは、障害のない学生も一部授業を共にする。知的障害者と共に学ぶ一般学生の学びの質や内容を分析すると、一般学生も自身になかった価値観に出会い揺さぶりを受けている様子がある。障害のある者ない者双方の自己教育と相互教育が生まれ、知的障害者が大学で学ぶことの意義を見いだせる。

第三部では基礎教育保障、文化芸術、語りといったトピックを捉えてインクルーシヴな学びが原理的に検討される。こんにち基礎教育の概念は、人が社会で生きる上で最低限必要な知識やスキルを身につけることから、社会的課題の解決に参加する市民の営みに付随するリテラシーやコンピテンシーの育成に広がっている。生涯学習を支える基礎と含意が拡張していく中で、「障害者の基礎教育」が問われている。

障害者の基礎教育を考えるときに、当事者運動であるセルフ・アドボカシー運動と自立生活運動が、当事者の主体形成のうえで重要な意味をもつと指摘する。障害者の生涯教育を考える際には、社会全体の障害者に対する認識や態度の変容、障害者の社会参加の機会創出、社会変革のための他者との連帯や連携まで視野に含めて展望すべきであるとする。

生涯教育も社会教育も、障害などの属性に関わらず、どの人も生き生きと社会に参加し、よりよい社会をつくる主体となることをめざしている。一方、世界はますます複雑化・高度化し、国家をまたいで社会課題を共有するようになった。地球市民としてのリテラシーやコンピテンシーを身につけることが生涯教育や社会教育に含まれるようになった。こうした動向のなかで、知的障害のある人々の学びをどうとらえ、どうインクルードしていくのか。本書は読者に議論を投げかける。

障害だけでなく、人種、民族、宗教、地域、性など、個々人の多様性が自覚されるようになりつつある。インクルーシヴな社会の実現は、メインストリーム社会を変えずに、それら多様な受け入れ先を用意することではない。取り組みの「本丸」はメインストリーム社会の再構築である。この意味で生涯教育も連続的である。どの人にも通じる生涯教育の原理追究と同時に、市民を主体とした社会変革を含む生涯教育の思考が求められている。